

非英語専攻生の英語教育に関する一考察  
—新設社会学部における英語教育の在り方を巡って—

English Education for Non-English-Major Students  
—Challenges for a newly-built faculty—

柴田 晶子  
SHIBATA Akiko

This article describes an example of the goal setting and the way of teaching English, which aims to enhance communicative abilities of non-English major students enrolled at a newly established faculty in a small university.

Firstly, the principle and the goal of English education of the faculty are described along with the contents and aims of 12 English subjects to be offered over four years in the faculty.

Secondly, actual classroom teaching practices for English I and English II are presented, both of which were already carried into action in the first semester in 2012. The effect of teaching practices in general is evaluated based mainly on the results of a student survey in the form of unnamed questionnaire. The evaluation is to be utilized to improve teaching plans not only for English I・II next year but also for English IV in the second semester, which is offered as a lineal successor of English I・II.

Lastly, the challenges hereafter will be discussed, citing the results of the test on Speaking and Writing done in the end of the first semester, and show some of the future plans.

はじめに

文部科学省は平成14年に『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想』に続いて、その翌年の3月には「英語が使える日本人」の育成に向けた行動計画を発表した。そこでは、国際的な相互依存関係が様々

な局面で深まっている中、英語が国際的共通語として最も中心的な役割を果たしているとの認識のもとに、英語のコミュニケーション能力を身に付けることが不可欠であると述べられている。さらに、この行動計画では、大学教育について「卒業したら仕事で英語が使える」ことが目標として掲げられており、そのような人材を育成する観点から、各大学にそれぞれの達成目標を設定することを求めている。

高等教育機関である大学には、様々な校種段階での選抜を経て入学に至ることから、その受け入れる学生の英語の基礎学力に学校間で大きな開きがあるのは明らかである。また、提供する専門教育の分野も多岐に渡っていることから、各大学・学部の卒業生が選ぶ職業にも大きな違いが見られる。したがって、「仕事で使える英語」の具体的内容を一般化することは極めて難しいと言える。何故ならば、研究者になるのか企業に勤めるのかといった進路の違いだけでなく、研究する分野や製造業なのか販売業なのかといった職種の違いによっても、必要とされる英語力は異なるからである。このように、前提となる基礎学力の違いや卒業後に就く仕事で求められる英語力の違いが大きいため、大学における英語教育の達成目標を一律に定めることは不可能である。この意味で、各大学が、育成を目指す人材像をなるべく具体的に明らかにした上で、その英語教育の達成目標も設定する必要があることは衆目の一致するところであろう。

本稿では、地域に根差した小規模な新設社会学部を例に挙げて、非英語専攻生に対する英語教育の在り方について、目標設定や実際の開講科目を確認した上で、半年間の授業の実際を振り返りながら、今後の課題を明らかにしていきたい。

## 1 新設社会学部の英語教育の概要

### 1.1 目標の設定と教育方法

札幌大谷大学社会学部は、平成 24 年 4 月に 70 名を定員として新設された、単一の地域社会学科のみで構成されている。地域で活躍する人材の基盤をつくるという観点から、社会人基礎力、知識・情報を獲得して分析する力、地域社会の課題を発見して解決する力を養成することを目指している。換言すれば、北海道の発展のために、地元の企業で働く人材や、地方公務員となって地域を支える人材を育てることを目指している。

その中で、英語教育はキャリア教育の一環として位置づけられ、表現力を磨くという視点に立って、英語関連科目の構成と各科目の目標が決められている。到達目標については、学生が意識しやすいようにとの配慮から、習得目標の語彙数を示した。具体的には、1 年修了時の目標は、中学校・高等学校で学習した語彙を使いこなせるようになることを目指して 3,000 語とした。2 年修了時までには 4,500 語、3 年修了時までには 6,000 語と学年を追うごとに徐々にその数を増やし、4 年卒業時の目標は仕事で使うにも十分であろうと思われる 7,500 語と設定した。習得を目指すこれらの語彙数とあわせて、それらの語彙を使って行えることが望まれる言語活動についても、次項で述べるように科目ごとに具体的に示した。

設定された到達目標達成のための指導方法は、社会学部全体の教育方針でもある「**Learning by Doing!**」の考え方に基づいている。英語を実際に使用する場面としての様々な言語活動に参加し、その中で使用経験を重ねることで英語は習得できるとする考え方を基本としている。そのため、授業時間を言語活動により多く充てられるよう、学生が自分自身で個々に学習できることと、教員の支援や級友との協力が可能な授業時間内にすべきこととの区別を明確にした。予習は CALL 教室での自習によることとし、予習を終えた時点で教科書問題の解答が自動的に入手できる（後述）ようにしている。したがって、原則として授業時間内で問題の解答確認をする必要はない。教員は予習の際に生まれた疑問や質

問に解説を加えるだけで済み、教科書のトピックに関連付けた言語活動の実施に多くの時間を割けるようになっている。また、目標の達成度を継続的に測るために、卒業時まで各学期末に、各クラスの各科目担当者による「まとめのテスト」とは別に、面接試験を含むスピーキングとライティングの能力測定を主とした学年統一の「総合英語力判定テスト」を実施することが計画されている。

## 1.2 開講科目と目標

学部創設にあたって、外国語教育は英語のみを対象とし、第4年次終了までに合計で12に及ぶ英語科目を開講することが、すでに決められていた。卒業までの4年間に開講される全英語科目を次頁の表1に示した。英語Ⅰと英語Ⅱは1年前期開講の必修科目である。表1からわかるようにそれぞれが2単位の演習科目であるため、1年前期には1週間に90分の演習が2コマずつ合計4コマ展開される。同一の教科書を基に、英語Ⅰはリーディングとリスニングの英語を受容する力の養成、英語Ⅱはライティングとスピーキングの英語を産出する力の養成を重視した科目である。重点の置き方は異なるものの、ともに高等学校卒業時までに学習した基本的な語彙や表現に習熟し、「簡単なことを正確に！」を合言葉に、実際の使用場面で英語が使えることを目指して授業が実施される。

具体的な言語活動としては、身近な問題に関する簡単な図表や指示・説明を理解して必要な情報を得ること、興味・関心のある話題や日常生活の身近な話題に関して内容を正しく理解すること、身近な問題に関する事柄について簡単な指示や説明を正しく伝えること、自分自身のこと・興味関心のある話題・日常生活の身近な話題に関して自分の考えや気持ちを伝えること、などを挙げている。

表1 英語開講科目一覧 (太字必修科目)

科目名称	授業の形態	単位数		第1年次		第2年次		第3年次		第4年次	
		必修	選択	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
英語Ⅰ	演習	2		2							
英語Ⅱ	演習	2		2							
英語Ⅲ	講義		2		2						
英語Ⅳ	演習	2			2						
英語Ⅴ	演習		2			2					
英語Ⅵ	演習		2			2					
英語Ⅶ	演習		2				2				
英語Ⅷ	演習		2				2				
実践英語Ⅰ	演習		1					1			
実践英語Ⅱ	演習		1						1		
実践英語Ⅲ	演習		1							1	
実践英語Ⅳ	演習		1								1

英語Ⅲは、英語Ⅳと同様に1年後期に開講されるが、英語12科目中唯一の週1コマの講義科目で、語彙習得のための知識や技能の獲得を目指して実施される。選択科目ではあるものの2年次開講科目を履修するための前提条件となっていることから、事実上は必修科目の扱いである。

英語Ⅳは1年後期に設定されていて、前期で学習した英語Ⅰ及び英語Ⅱの発展的な学習を行うための必修科目である。1週2コマの演習を通して、よりまとまりのある文章を用いて、英語ⅠやⅡの科目説明で挙げたものと同様の言語活動ができるようになることを目標としている。

英語ⅤとⅦは、それぞれ2年次の前期と後期に開講される選択科目である。週2コマの演習を通して、テレビや新聞やインターネットを活用して時事的な話題に関する必要な情報を入手すること、口頭で他者と共有できること、大意を把握できること、同じ情報に対する異なる考え方の存在に気付けることなどを目標としている。

英語ⅥとⅧも同じく2年次の前期と後期に連続して開講される選択科目で、1年次の英語Ⅰ、Ⅱ、Ⅳと同様に4技能の習得を目指して、それ

ぞれ前・後期に週 2 コマの演習が実施される。使用場면을日常生活から、さらに広がりのあるビジネス場面へと移し、大学卒業後の就職先での英語使用にもつながる知識や技能を習得することを目標としている。

実践英語のⅠ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳは，3・4年次の各学期に開講される選択科目である。これらの科目は，それぞれ各学期週 1 コマの演習により，通訳技術の演習を通して，北海道の産業の紹介や宣伝に役立つ効果的な表現を身につけ，会議，プレゼンテーション，接待の模擬練習を経験しながら，実践的な英語力を継続的に高めていくことを目指している。

このように開講 12 科目中 11 科目の授業形態が演習である。表中の英語Ⅴ以下 2 年次以降に開講される全ての科目は，1 年次後期開講科目英語Ⅲと同様に選択科目ではあるが，学部のカリキュラムにおいては必修科目に準ずるものと位置づけられており，全学生に積極的な履修を促すこととしている。

さらに，これらの「英語」の文字が付された 12 科目以外にも，英語でのプレゼンテーションスキルの習得を目指す「表現法Ⅵ」という選択科目が 2 年次後期に設定されている。

## 2 授業の実際

ここではまず，すでに授業を終えた第 1 年次前期開講の必修科目，英語Ⅰと英語Ⅱを中心に，今年度の当該授業の実際について述べることにする。次に，授業を終えた時点で行った学生アンケートによるプログラム全体の評価から浮かびあつた課題を中心に，継続すべきことと改善すべきことについて述べる。最後に，これら 2 科目の発展的科目として位置づけられている後期開講必修科目の英語Ⅳについて，この評価結果を生かして取り入れた授業実施計画の改善策について述べる。

### 2.1 英語Ⅰと英語Ⅱの授業の実際

1 年次前期必修科目として設定されている英語 I と英語 II では、週当たり各 2 コマ、合計 4 コマの授業を、独自に作成した入学時のプレースメントテストの結果に基づいた習熟度別の 4 クラス編成（成績上位から a, b, c, d ）で実施した。なお、開講初年度にあたる本年度は各クラスともに在籍数は 11 名であった。この 2 つの科目では、1 冊の教科書を共通のベースとしながら、英語 I では主に受容的な力の育成を、英語 II では主に産出的な力の育成を目指した言語活動を行うことを計画した。

使用教科書は、南雲堂の「総合英語パワーアップ〈入門編〉」であるが、これは大学生向け教科書としては難易度が決して高くないものである。学部開設初年度であり、受け入れる学生の基礎学力については想像に任せるしかなく、選定の基準が決めにくい状況ではあったが、日常生活の身近な話題を取り上げていて、身に付けてほしいと考える最低限の語彙や表現が扱われていて、4 技能の育成を目指して編成されたものという視点に立って、この教科書を選定した。前述したように、自由に設定する言語活動を主として授業を構築することが決まっていたため、学生にとって難易度が高すぎる感じられる教科書を使用するよりは、授業の成否にマイナスの影響を及ぼすことは少ないと考えた結果でもある。

予習段階では、前述したように、教科書の問題は全て CALL 教室を利用して自学自習で終わることを義務付けた。教員自作の学年統一予習教材には、出版社の許可を得て教科書を pdf. 化して載せ、問題の解答をその横に書き込める形式とした。1 ユニット全体を学習し終えて提出した時点で、採点結果とともに各問題の正答が本人の解答と併せて表示される仕組みである。この Web 上での予習状況は、学生の提出の有無のみならず解答結果も全てサーバー上に記録されるため、4 クラスの成績の一括管理が容易で、学期末の評価に際して 10 点満点に換算した得点を平常点として算入した。

授業では、まず上述の予習状況確認の意味から、毎時間 5 分程度で、

英語Ⅰでは語彙 10 題、英語Ⅱでは教科書例文を基にした並べ替え英作文 5 題の小テストを行った。このテスト結果も学期末評価の際には 10 点満点換算で平常点として算入した。予習の際に学生が抱いた、問題の解答に対する疑問や、教科書内容に関わる質問は、随時、各担当教員が授業中に取り上げて解説することにした。その後、各教員（英語Ⅰについては非常勤講師 3 名、英語Ⅱについては非常勤講師 1 名と専任教員 1 名が担当）が、担当クラスの実態を踏まえて計画した様々な活動を行った。具体的には、英語Ⅰでは、教科書のリスニング・セクションを活用したディクテーション、リーディング・セクションの長文を利用した音読やシャドウイングやペアの会話練習、補助教材を利用したリスニングなどを行った。英語Ⅱでは、発音やイントネーションの練習、教科書の各ユニットのトピックに関連した口頭発表や自由英作文などが行われた。校舎を英語で案内するといったシミュレーション活動も行った。

学期末の評価では、学部の方針に基づき、日常の授業への積極的参加を促すために、いわゆるまとめテストの配点は 50%、課題提出や出席の状況などが残りの 50%となっている。

## 2.2 英語Ⅰと英語Ⅱの授業評価と改善点

### 2.2.1 英語授業評価アンケート

新設学部における英語プログラムのスタート学期の授業を終えた平成 24 年 8 月 1 日の時点で、学内統一形式のアンケート票により実施する授業評価とは別に、外部のアンケート集約サイトを利用して、学部の英語プログラムに関する「英語授業評価アンケート」（参考資料参照）を実施した。サイトアクセス時に ID やパスワードは要求されるものの、回答の際には個人が特定されない無記名式のアンケートに Web 上で答えるものである。新しい試みとして実施された授業の実態を把握して、授業

の内容や進め方についての改善点が明確になるように、専任（予定者を含む）教員 3 名により、なるべく具体的な質問を設定し、さらに、自由記述で学生からの自由な意見が得られるようにした。

以下に、授業の在り方に関わる代表的な設問について、アンケートの単純集計結果を抜粋していく。5 件法の設問については、「とてもそう思う」:「ややそう思う」:「どちらともいえない」:「あまりそう思わない」:「全然そう思わない」の順で実数を上げ、さらに、それぞれの得点を 5 : 4 : 3 : 2 : 1 として算出した全回答者 44 名の平均値を括弧内に示すことにする。

### 2.2.2 アンケートの単純集計結果から

まず、授業運営の基本方針に関わる設問についての集計結果から見ていくことにする。

「教科書の学習は自分で終えて、授業では英語を使う活動を通して体験的に英語を身に付けるという目標は良いと思う」か、という基本方針に関する問いについては、「とてもそう思う」から「全然そう思わない」まで、5 段階評価の実数がそれぞれ 15 : 16 : 10 : 2 : 1、平均値も 3.95 となり、肯定的にとらえている学生 31 に対して否定的に捉えている学生は 3 と、少数であることが分かった。しかし、「前期の授業でこの目標は達成されたと思うか」という問いに対しては、3 : 19 : 19 : 2 : 2 (3.50) と、実数で見ると評価がかなり下に流れるという結果となった。

「共通の教科書をベースに週 4 回の授業で 4 技能を練習するという当初の設計通りに授業が運営されたか」については、12 : 20 : 8 : 4 : 0 (3.91) という回答結果で、肯定 : 否定は 32 : 4 で平均値は「ややそう思う」にきわめて近い数値となった。

技能別に「授業で使う機会が多くあった」かどうかを尋ねたところ、「聴く」が 25 : 17 : 2 : 0 : 0 (4.52) と、否定的な回答は全く無く、平

均値も1番高かった。以下、「読む」が19:17:5:2:1(4.16)、「話す」が18:18:5:2:1(4.14)が続いた。「書く」技能については、他に比べて使う機会が少なかったことを伺わせる15:14:4:11:0(3.75)という結果となったが、それでも肯定:否定は29:11となり、4つの技能それぞれを使う機会がかなりあったと感じていることは推察できた。

次に、授業を終えての感想に関わる設問の集計結果である。「授業での達成感があった」かについては2:18:12:10:2(3.18)と決して高いとは言えないものであった。しかし、「もっと勉強したいと思った」かについては7:20:8:7:2(3.52)という結果となり、さらに「授業が楽しいと思えた」かについては11:18:12:2:1(3.82)と、肯定的回答が多く見られた。

さらに、アンケートでは、言語活動中心の授業を経験したことによる学生の変化も探ってみた。英語学習で一生懸命取り組んだこととして、出席することや授業に積極的に参加することを挙げた学生が、それぞれ25名(56.8%)、22名(50.0%)と「参加」を重視する回答が目立った。大学入学後に伸びたと思う力については、「書く力」は5名、「読む力」は9名と少なかったものの、「聴く力」は18名(40.9%)、「話す力」は27名(61.4%)の学生が挙げている。また、英語力が伸びた要因としては、実に22名(50.0%)が「良いクラスメートと一緒に学べたこと」を挙げ、「英語をたくさん使ったこと」が19名(43.2%)、「教師の教え方や励まし」が13名(29.5%)でこれに続いた。入学後、英語に関して変わったと思えるところを問うた設問では、一番回答が集中したのは「完全でなくても自分の伝えたいことを何とか表現しようと努力するようになった」の28名(63.6%)で、「相手の伝えたいことがだいたいわかればよいと思えるようになった」が19名(43.2%)、「全部わからなくても相手の伝えたいことがだいたい理解できるようになった」と「間違いを恐れずに英語を口にできるようになった」が、それぞれ11名

(25.0%) で続いた。

### 2.2.3 アンケート結果の考察

アンケート結果から、全体としては授業の目標は肯定的に受け止められていることが分かったので、計画当初からの「**Learning by Doing!**」という方針は踏襲していくことに大きな問題はないと考えられる。しかし、この目標の達成度に対する印象の平均値は 3.50 と決して高くない。しかも、「とてもそう思う」が 3 名、「どちらともいえない」は「ややそう思う」と同数の 19 名という実数からすると反省すべき点は大いにある。

この回答結果の原因としてまず考えられるのは、予習教材作成段階でのトラブルが相次いだため、教材のスムーズな提供ができなかったことである。このことが、入学早々の緊張感の中で、学生たちが目新しい学習方法に馴染むのを一層難しくしたと思われるからである。実際、この点については、自由記述の中で不満を述べている学生も少なくなかったが、前期後半からは、トラブルの少ない方式に転換したことで一応の改善は図れたものと考えている。

もう一つの原因としては、本学の授業運営方針を授業担当者が充分理解しないまま授業を開始せざるを得なかったという事情がある。授業担当者は、専任、非常勤ともに学部開設と同時の着任ではあったが、着任前から複数回の説明会を開いて授業運営の方針やそれに基づく教授法について議論を重ねていた。しかしながら、他大学ではあまり例のない、したがって教員自身にとっても経験が少ない本学の学年共通の教授法に習熟するまでには至っていなかったことが考えられる。実際の授業を進めつつ、予測できなかった問題が起きた時には、当初の方針に立ち返って確認しながら解決するという、いわば臨機応変な対応を余儀なくされたことが、学生にとっては一貫性を欠いた指導と受け止められた可能

性は十分ある。自由記述の中でも、教員間の行き違いや一貫性の欠如を指摘する記述が見られたこともあり、教員間の連絡の徹底と共通理解の重要性は、今後も心に留め置くべき課題である。

しかしながら、このように反省すべき点が少なからずあるにしても、全体としては4技能を使う場面がある授業だったと受け止められていることには安堵する。授業での達成感を得られた学生の割合は決して満足できるほど高いとは言えないが、ある意味では混乱の中で終わった前期授業にもかかわらず、更なる学習への意欲を持った学生が27名(61.4%)と、意欲を持てなかった学生9名(20.5%)の3倍に上っていること、授業が楽しかったと思う学生が29名(65.9%)に対して楽しいと思えなかった学生が3名(6.8%)しか出なかったのは、活動中心の授業を目指したことと関係が深いと思われる。さらに、授業への積極的参加を心掛けた学生が半数を超えたが、平常点重視の評価方法と併せて、言語活動中心の授業であったことの影響も大いに考えられる。実際に、自由記述の中でも、教科書の問題を解いたり説明を聴いたりするだけの授業を批判する記述や、それとは逆に、自ら参加する活動中心の授業を肯定する記述が多く見られた。

授業を受けた後の変化については、「読む力」・「書く力」の伸びが実感されていないことが伺える回答となったので、「読む・書く」活動を「聴く・話す」活動と、どのように組み合わせていけるかを考えていく必要がありそうである。しかし、「聴く力」については4割、「話す力」については6割を超える学生が、大学入学後に伸びたと答えていることや、これらの力が伸びた要因として4割以上が「英語をたくさん使ったこと」を挙げていることなどは、活動中心を目指した授業の成果と思われる。また、この英語力が伸びた要因として、半数が「良いクラスメートと一緒に学べたこと」を、3割近くが「教師の教え方や励まし」を挙げているのも、正否だけが重視されるのではない、活動中心の授業の進め方と

の関連が伺える。さらに、「完全でなくても自分の伝えたいことを何とか表現しようと努力するようになった」学生が 6 割を、「相手の伝えたいことがだいたいわかればよいと思えるようになった」学生が 4 割を超えたことや、「全部わからなくても相手の伝えたいことがだいたい理解できるようになった」と「間違いを恐れずに英語を口にできるようになった」を挙げた学生が 4 分の 1 に上ったことなど、6 か月の言語活動中心の授業体験が、英語学習に対する意識に望ましい変化をもたらしたことが推察できる結果となっている。

### 2.3 英語Ⅳの授業設計

前項のアンケート結果を踏まえて、後期に開講される英語Ⅰ・Ⅱの発展的な位置づけにある英語Ⅳでは以下のような改善策を講じた。

まず、第一に、授業目標と運営方法の一致と教員間の連携についてである。担当教員は 6 か月の間、戸惑いながらも授業を共に実践してきており、4 月時点とは異なり活動を授業の中心に据えることへの困惑や混乱はなくなってきている。しかし、更なる共通理解を得るために、後期授業開始前に授業担当者との打ち合わせを今一度設けて、本学の授業運営の基本的な考え方や、上記のアンケート結果をもとに学生が求める授業も活動中心のものであることを再確認した。さらに、全クラス共通に行う言語活動のテーマを 6 か月の授業計画の中に具体的に示して、前期同様の習熟度別に編成されたクラスそれぞれの実態を考慮しながらも、教員間での違いが必要以上に大きくなるように配慮した。

次に、活動のための時間確保という観点では、学生には前期同様に教科書の問題には Web 上で解答しておくことを予習として義務付けた。後期授業の開始時点までに解答時のトラブルが少なかったソフトを使って予習教材の作成を終え、前期の反省に基づいて変更した予習の方法、評価への算入割合、ユニット毎の提出締切日などの連絡を、英語教員が発

行しているニューズレターを通して周知徹底を図った。また、予習の段階で抱く文法に関する疑問や質問に対しては、新たに学生が個々に自由に Web 上に提出できるシステムとして「英語質問箱」を作り、これをユニットごとに集約して担当教員に知らせることで、授業で取り上げてクラス全体に説明すべきものか、個々の学生にメールや連絡板を使って説明を返すべきか、教師がその解説方法を適宜取捨選択できるようにした。習熟度別に編成された同一クラス内であっても持っている文法知識の個人差が大きいことを踏まえ、それぞれの学生が疑問を抱いたタイミングを捉えて効率的に対応することを目指したものである。

さらに、担当教員の話し合いの中で音読練習は主に授業外の自学自習に任せることを決めて、教科書のリーディング・セクションで取り上げられている文章を個々に音読練習し、その成果を録音して提出することを学年共通の課題とすることになった。

英語Ⅳ終了時点での英語プログラム評価を活かして、英語Ⅰ・Ⅱの授業計画を更に改善していきたいと考えている。

### 3 考察—まとめと今後の課題

着任当日が入学式、その翌々日には授業が開始されるという過密スケジュールの中で、前述したように、当初予定されていた予習教材が CALL 教室のシステムとの相性が悪く、うまく作動しないなどのトラブルが相次ぎ、教員側の準備不足が、言語活動のための時間確保が前提となっている英語プログラムそのものの評価に大きく影響したことは否めない。しかし、それでもなお、言語活動を授業の中心とするという基本的な考え方が学生から支持されたことは大きい。また、英語学習に対する意識も望ましい方向に変化してきていることから、大学入学以前はあまり経験がなかった「自ら英語を使ってみる活動」への参加を通して、授業を試行錯誤が許される場として捉えるという方向に、学生の意識を転換さ

せることができたと言えそうである。

従って、今後の第一の課題は、肯定的に捉えられた授業内での様々な活動が、ただ「楽しかった。」で終わることなく、「～ができるようになった。」と自らの成長の実感と結びつくように、長期的展望に立ってそれぞれの活動間の関連を考えた授業を構成していくことにあると思われる。前期末に実施したスピーキングとライティングの能力の測定を主とした「総合英語力判定テスト」において、上述のアンケート結果を裏付けるように、面接試験では、臆することなく、間違いを恐れずに英語を話そうとする姿勢ができつつあることは見て取ることができた。その一方で、コンピュータを利用して同時に実施した試験では、簡単な質問にその場で答えるスピーキングの問題や、指示された語を用いて写真や絵を描写したり、指示に従って手紙文を作成したりするライティングの問題において、語彙や文法についての正確さに欠ける傾向が見られた。1年生向けの合言葉として学生に示している「簡単なことを正確に！」という目標の達成に近づけるためにも、正確さへの注意喚起は不可欠である。

そのためには、これまで以上に教科書で使われている語彙や構文との関連に配慮して、「言語材料のリサイクル」を心掛けた言語活動とすることで、その定着率を高める必要があるようである。無味乾燥な繰り返しによるのではなく、「使う」活動を通して正確さへの注意を喚起していくことが望まれる。音声で聞き取った概要の詳細を文字情報で確認するなどして「聴く」活動と「読む」活動をつなげたり、自ら音声で表現したことを文字でも表現してみるなどして「話す」活動を「書く」活動につなげたりすることは容易にできそうである。学習者自らが活動を振りかえり、間違いに気づいたり、よりふさわしい表現を思いついたりできるような場を提供し、文字言語を通して学習者自らの気づきを記録に残すことを定式化することでも正確さへの注意喚起はできそうである。まずは実際に活動の中で英語を使い、活動を振り返って出来なかったことや

間違えたことを学習して、再度、使う活動を行うという、信州大学酒井教授の提唱する Do-Learn-Do Again の学習サイクルを積極的に取り入れてみたい。

また、更なる学習への意欲を育てるという視点からも、あくまでも能動的に授業に参加できるよう支援する必要があることが分かった。次年度に開講される英語Ⅴ・Ⅶでは、時事的な題材を扱うことになっているが、題材の内容理解で終わるような受動的な授業とならないように留意していきたい。担当者の話し合いの中で、題材となる時事的な話題そのものへの関心を高めることや、メディアにおける情報の提供方法に関する知識に習熟することを狙い、インターネットなどを通じて自ら必要な情報を探す活動なども取り入れることや、大学 PR の英字新聞や英語によるニュース番組を作成して学内で発表することを最終目標として掲げることで、授業内での様々な活動と授業の学習内容との結びつきを意識させて、より積極的な参加を促すことを計画している。

新設社会学部の「Learnig by doing!」という教育方針のもとで、あらかじめモデルを提示して、間違いが生じないよう練習を重ねたうえで、初めて表現活動に移るといった Presentation-Practice-Production という従来型の英語教授法のサイクルを、間違いや戸惑いから自ら積極的に学ぶという Do-Learn-Do Again の学習サイクルに転換することで、「使える英語」の習得につなげることを目指して行きたい。

#### [参考文献]

- 小池生夫, 他 2010「企業が求める英語力」朝日出版社  
酒井英樹 2012「聞くこと・考えること・関わることを大切にした英語授業」北海道英語教育学会第13回研究大会講演資料  
内藤永, 他 2009「職場における英語使用者が抱く英語基礎力像」  
第48回 JACET 全国大会シンポジウム発表資料 ESP 北海道  
内藤永, 他 2010「グローバル企業で使用される書類の言語学的特徴」

《参考資料：英語授業評価アンケート；質問の概要》

ここでは、4 クラスの全学生が回答すべき質問のみに限定し、枝間を省略して引用する。(なお、不正回答が多かった質問は削除してある。)特に注記がない質問は 5 件法で、括弧内に示した尺度に沿って実数を順に挙げてある。

《授業について》

・週 4 回の授業では、教科書の同じ課に出てくる共通の語彙や表現を使って、聴く・読む・話す・書くという 4 つの技能を満遍なく練習できるように設計されていました。その設計通りに教えられたと思いますか？(とてもそう思う→全くそう思わない) 12 : 20 : 8 : 4 : 0

・毎回の授業であなたが行ったことで、一番印象に残っていることは何ですか。当てはまるものを印象の強い順に 3 つ選びなさい。

(不正回答が多かったが、加重値合計で多い順に 3 つ挙げる。)

ペア・グループでの会話演習、英問英答、リピート練習

・毎回の授業で、あなたはどれぐらい英語を話す機会がありましたか。(たくさんあった→全然なかった) 18 : 18 : 5 : 2 : 1

・毎回の授業で、あなたはどれぐらい英語を書く機会がありましたか。(たくさんあった→全然なかった) 15 : 14 : 4 : 11 : 0

・毎回の授業で、あなたはどれぐらい英語を聴く機会がありましたか。(たくさんあった→全然なかった) 25 : 17 : 2 : 0 : 0

・毎回の授業で、あなたはどれぐらい英語を読む機会がありましたか。(たくさんあった→全然なかった) 19 : 17 : 5 : 2 : 1

・毎回の授業のあと、「きょうは英語で何かができた!」とか、「英語で何かができるようになった!」というような達成感を味わうことはありましたか。(よくあった→全然なかった) 2 : 18 : 12 : 10 : 2

・あなたの所属したクラスのレベルは全体的にどうでしたか。(難しすぎた→易しすぎた) 1 : 10 : 25 : 6 : 2

・授業は、「もっと英語を勉強したい」という気持ちにさせるようなものでしたか？(とてもそう思う→全くそう思わない) 7 : 20 : 8 : 7 : 2

・総合的に判断して、授業では「楽しい」と思うことができましたか。(とてもそう思う→全くそう思わない) 18 : 12 : 2 : 1

《教科書について》

- ・教科書は、興味の持てる内容でしたか。  
(とてもそう思う→全くそう思わない) 4 : 18 : 12 : 6 : 4
- ・教科書を学習した進度についてどう思いますか？  
(速すぎた→遅すぎた) 5 : 8 : 28 : 3 : 0
- ・教科書の難易度についてどう思いますか？  
(難しすぎた→簡単すぎた) 0 : 9 : 22 : 9 : 4

教科書の使いかた：教科書は、学生が一人でできる問題はすべて授業前にすませておき、教科書の使いかたについて：授業では、学生が教科書の英語をいろいろな活動を通して実際に使ってみるによって、英語を体験的に身に付けていく」ことを目指しました。

- ・その目標は、前期の授業で達成されたと思いますか？  
(とてもそう思う→全くそう思わない) 3 : 19 : 18 : 2 : 2
- ・その目標は良いことだと思いますか？  
(とてもそう思う→全然そう思わない) 15 : 16 : 10 : 2 : 1
- ・教科書を、事前に、すべて、自分で予習した上で授業に参加するというのはどうでしたか？  
(かなり難しかった→全く難しくなかった) 1 : 10 : 12 : 18 : 3

#### 予習方法

- ・諸般の事情で予習方法が途中で変わりました。もしどの方法にも機械的な障害や問題がなければ、あなたにとって、次の予習方法のうちどれが一番あっていましたか？  
1位；課題提出用紙， 2位；Webtube教材， 3位；エクセルブック

#### 《試験・課題について》

##### 小テスト

- ・予習での自分の頑張りを適切に測定してもらえる内容だったと思いますか？ (かなり適切→かなり不適切) 9 : 12 : 15 : 4 : 4
- ・週4回という回数はどうでしたか？  
(多すぎた→ちょうど良かった\*3段階) 8 : 18 : 18
- ・問題量は どうでしたか？  
(多すぎた→少なすぎた) 3 : 4 : 37 : 0 : 0
- ・テストの難易度はどうでしたか？  
(難しすぎた→易しすぎた) 3 : 4 : 37 : 0 : 0

##### 課題

- ・予習として課題はどれぐらいの割合で出されましたか？  
(毎回出された→全く出されなかった) 6 : 22 : 8 : 8 : 0

試験（中間，まとめ）

・それまでの自分の頑張りを適切に測定してもらえる内容だったと思いますか？（かなり適切だった→かなり不適切だった） 6：22：14：1：1

・問題量はどうでしたか？

（多すぎた→少なすぎた） 7：17：18：2：0

・難易度はどうでしたか？

（難しすぎた→易しすぎた） 6：19：15：4：0

《教具・施設について》

・授業中にどのような視聴覚機器がどの程度使われましたか？

（よく使った→全く使わなかった＊4段階）

CD 32：4：7：0

DVD 4：20：14：4

パソコン 20：13：6：5

・CALL 教室に設置された機器を使ってどんな活動をしましたか？

（半数以上の学生が挙げた活動）ペア対話 44，CD を聴いた 30，ディクテーション 27，音声録音 25，DVD を見た 25，シャドウイング 23

《その他》

・前期の英語授業であなたが一番一生懸命とりくんだことは何ですか？

1 位；出席 25，2 位；授業参加，3 位；予習・小テスト・課題

・自分の英語能力が伸びる上で，一番役に立ったことはなんだと思いますか？

1 位；良いクラスメートと学べたこと，2 位；英語をたくさん使ったこと，3 位；先生の教え方や励まし 13

・大学に入ってから今まで，英語に関してあなたは一番伸びたと思うのはどんな能力ですか？

1 位；話す力 27，2 位；聴く力 18，3 位；読む力 9

（以下，4 位；書く力 5，6 位；語彙量 4，7 位；文法知識 3）

・大学に入ってから，英語に関してそれまでと自分が一番変わったと思えるものを 2 つまで選んでください。

1 位；完全でなくても何とか表現しようと努力するように 28

2 位；伝えたいことがだいたい理解できればよいと思えるように 19

3 位；伝えたいことがだいたい理解できるように 11

間違いを恐れずに英語をくちにできるように 11

・2 度発行した Newsletter は大谷大学の英語の学習課程を理解する上で役立ちましたか？

（かなり役立った→全く役に立たなかった） 4：6：21：7：6：

《自由記述》回答省略

- ・大谷大学社会学部の英語の授業の良いところは何だとおもいますか？
- ・大谷大学社会学部の英語の授業で改善すべきところは何だと思えますか？
- ・英語の授業に期待することを書いてください。

(しばた あきこ，札幌大谷大学社会学部教授)